
真・恋姫†無双～暴君と呼ばれし者～

夜桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫十無双〜暴君と呼ばれし者〜

【Nコード】

N4732W

【作者名】

夜桜

【あらすじ】

初めまして、作者の夜桜です

この度、真・恋姫十無双の二次小説を執筆しましたので投稿しました(*^o^*)

この作品は、オリジナルルートで益州牧、劉璋を主人公にしました！ヒロインは未定、オリキャラ多数、キャラ死亡あり、一刀は不良となり蜀ルートの駄文です

作者はあまり三国志の人物を知らないんですよ（^| ^ ;）
一応、ネットや本で調べたんですがね。そこで益州や劉璋に関係あ
る武将を教えてください
オリキャラとして出すかもしれないんで（^O^）

それとオリキャラ募集中です

これからも頑張っていくので暖かい目で見守ってください（^O^）
/

【プロローグ】（前書き）

初めて書きました

プロローグです（*^o^*）

【プロローグ】

【プロローグ】

——ここは、益州のとある森。

そこに、左目に包帯を巻いた一人の青年がボーっと立ち空を見上げたまま動こうとしなかった。

そんな、青年に薄汚い笑みを浮かべて近づいてくる三つの影があった。

『兄貴！ あんなところに突っ立てるカモが居ますぜ！』

『本当なんだな！ 兄貴、アイツから金目の物を奪うんだな！』

『へへへ…言われなくても分かってるぜ』

彼等は黄色い布を頭に巻いた黄巾党という山賊だった。

山賊達はすぐに青年を取り囲み、血塗られた剣を青年に向けていた。

『おい、兄ちゃん。こんな所で突っ立てると危ないぜ？』

『こわ〜い！ おじさん達にやられちゃうんだな！』

『命が欲しかったら、金目の物をよこしやがれ！』

そして、剣を向けられたまま黙っていた青年は口を開いた

『…君達に僕から、質問があるのですがいいでしょうか？』

『ああ！？ 質問だあ！？』

『そうですよ。じゃあ質問しますね…君達は罪を犯したことがありますか？』

『何、言っただお前？ 俺達は山賊だ！ 村を襲撃したりして悪いことはたくさんしてきた！』

リーダー格の山賊はその他にも自分がしてきた事を自慢気に話していた。

『…そうですか。…じゃあ、僕が君達の罪を清算してあげましょ〜』

青年はリーダー格の山賊に素早く懐に入り、山賊の腰に差しであるまだ抜かれていないもう一つの剣に手を掛け

『安心してください…君達が早く死にたいと思うようにじわりじわりと……僕が〜』

『〜綺麗に斬ってあげます』

この後のことは分からない。

一つ分かることはこの森で山賊達の断末魔の叫び声が聞こえたことだけだ……。

そして…何があったかを知るのは全身血に塗れた青年だけであつた。

『……さん。…見てますか？ 僕はまた…罪を清算してあげましたよ……これを続けければ……いつか…僕の大罪は許されるのでしようか？』

――ふたたび青年は空を見上げるのだった。

第一席〱劉焉、託すのこと〱（前書き）

主人公、出番少ないです。

誰か桔梗の口調を教えてくださいm〱〱m

第一席〱劉焉、託すこと〱

――益州、成都城

成都城のとある部屋。

この部屋である会話がされていた。

『ごほうごほう……ごめんなさいね、紫苑、桔梗……急に呼び出しちゃって』

顔色が悪く、寝台に上体を起こしているのは、姓名劉焉 字を君朗 真名を晴香。この益州を治める益州牧である。

そして彼女に呼ばれた、紫苑と桔梗という二人の美女は

『…晴香様。あまり無理をなさらないほうが…』

劉焉を心配し背中をさする、薄紫色の髪に扇情的な服装の彼女は、姓名を黄忠 字漢升 真名を紫苑。少女であった時から劉焉こと晴香に仕えている劉焉軍の重鎮である。

『そうですね！ 今日はいつそう顔色が優れない様子…無理をなされるな』

紫苑の後ろで酒の入った徳利をぶら下げ、肩に酒と書かれた鎧を着た彼女は、姓名を敵顔 真名を桔梗、紫苑と同じく少女であった時から劉焉に仕えた重鎮である。

そんな二人を見て、晴香はクスクスと笑う。

『二人ともありがとう …安心してまだ死なないわ…。…それより…二人に頼みたいことがあるの…』

笑っていた晴香は真面目な表情になり二人を見つめる。

『儂等二人に頼みごととはなんですか？』

『私が死んだら…あの子達の親代わりを頼みたいの。あの二人は私が忙しくて、母親らしいことを何ひとつ出来なかったの……だから、お願い…』

『…私の代わりにたくさん愛してあげて』

頼みごととは一人の母親としての最後のお願いであった。

二人は頷くと頭を下げて部屋を出て歩き出すのだった。

『たくさん愛してあげて…とは儂は昔からあの二人が可愛くてしょうがないから問題ないが……紫苑…お主はどうする？』

二人は廊下歩きながら話す。

『私は…劉循様なら大丈夫。でも正直……劉璋様は…無理よ。たとえ主君の命令であつても』

『それはそうじゃな…あの
‘血の粛清’事件でお主の夫は亡くなったのだったな。その首謀者を愛することは無理かの』

『…ええ。私は…一生、許せないと思う。』

紫苑は、唇を噛み締め、数年前にあつた事件を思い出していくのだった。

そんな親友の姿を見た、桔梗は

『昔は優しく、心が暖かい人物だったのに、今はだいぶ冷たくなつてしまったの…‘凜王’（りおう）』

一人つぶやき、酒が入った徳利を口に運ぶのだった。

――場所が変わって、劉焉の私室。

『紫苑には悪いことを頼んじゃったわね…。というか…いつまでコソコソしているつもり？』

劉焉こと晴香が私室の扉を睨みつけながら言うと扉が開き二人の青年が入ってきた。

『おや、病を得て死んだと聞いて…見に来たのですがまだ元気そうですね』

『けっ！ 早くくたばっちまいな！』

『あら酷いことを言うのね。…于吉、左慈、私はあなた達の協力者だっていうのに』

晴香はニンマリと笑い二人を見るのだった。

『まあ、その点は感謝してますよ。…というか、これまで協力してもらった、ではなく、させられた、ですが…』

『そうだったっけ？…でも、二人にはお礼を言っわ、第二の人生をこの世界に転生させてくれて……ありがとね』

晴香は于吉と左慈に笑いかけのだった。心から感謝を込めて

『急にお礼なんていいやがつてき、気持ち悪い奴だな！ 顔色悪いんだから、さ、さっさと寝ろ！ ……これ食べてからな』

左慈は、若干頬を赤く染め、先程から持っていた桃が入ったカゴを渡す。

『…桃？ しかもこれ幽州産の高級品じゃない……もしかして、私のために買ってきてくれたの？』

『ち、違っぞ！ 偶然……そう偶然！ 幽州に行く用事があったからついでに買ってきてやっただけだ！』

『ああ……だから、左慈は私に小遣いと幽州の行き方を……ぐへっ！！』

突如、于吉の腹に蹴りが入ったのだった

『左慈はいつも私には手厳しい……ですが……そこが、良い！』

その光景を見ていた晴香は苦笑いをしながら、本題へと入ろうとあることを聞いた。

『二人は仲がいいわね。……で、ここに来たのは……お見舞だけじゃないんでしょ？』

言われた、二人は顔を見合わせて真面目な表情になり

『…奴が近いうちに現れる。俺達の宿敵である、‘北郷一刀’が…』
『そう…じゃあ…』

『あなたの息子さんを利用してもらいますよ。…それが、転生する時、誓った契約ですから……』

――それから、この部屋では会話は続けられたが、その内容を知るものは居なかった。

――この日から、五日後のことだった、益州牧劉焉が亡くなったのは……。

――その頃、益州のとある森では…辺りは真っ暗になり

青年はいまだに空を見上げていた。

そして、青年が見上げていた夜空に一つのまばゆい流星が幽州方面に向かって落ちて行ったのだった。

『…白き流星が墮ちるとき、乱世を終わらせる…天より遣われし天使が舞い降りる。』

——君が僕を楽しめさせてくれるのかい？

——天の御遣い。』

この時から、劉季玉の齒車が再び動き出したのだった。

第二席〱劉璋、登場すること〱（前書き）

今回のお話しは、オリ主とオリキャラばかりですm〱〱m

次回のお話しでは、紫苑、桔梗をたくさん出したいと思います〱*

〱〱〱*

第二席へ劉璋、登場すること

益州牧劉焉が病で亡くなった三日後、成都では追悼式が行われていた。

そして、追悼式場では劉焉を支えてきた武官、文官の将に加え、益州地方の有力な豪族達が集まって居た。そこに息子である劉璋が居るのは当たり前のだが姿はなかった。

『桔梗様、凜王様をお見かけしませんでしたか？』

劉焉軍の重鎮である、嚴顔こと桔梗に話しかけたのは緋色の長髪で服装は上はサラシで下は、模様が入った赤色の袴、着た美少女であつた。

『ん？…風音か、悪いが儂もわからん。てつきりお主と一緒に居るのだと』

桔梗に話しかけた人物は、姓名を張任 字を飛燕 真名を風音。劉璋、直々に指名された側近であり、劉璋の真名を許された数少ない人物の一人である。

昔は、張燕と名乗り飛燕と恐れられとある州で数万を率いた有名な山賊の頭であつたが漢軍により集められた連合軍に攻められて、董卓軍に所属する、呂奉先に完膚無きまでに叩きのめされて、生き残った少数の部下と共に、都洛陽から遠い益州へ逃げて来たが運が

悪いのが良いのか分からないが、劉璋と出会い、気に入られ名を変えさせられた可哀想な子である。

最初は変人の劉璋を嫌がっていたが、今では劉璋の立派な忠犬となっているらしい。その姿を見た劉璋の母である劉焉に、‘パトラッシュ’と呼ばれていたのは、また別のお話である。

『はい…いつもなら毎朝、私の部屋に私の髪の毛をイジリに訪れるのですが…』

『今日は来なかったと…やはり母親を亡くされたのだ酷く落ち込んでいるのだろう…』

『ええ…私はもう少し捜してみます。見つければ追悼式場へ連れて来ますので』

張任こと風音はある場所を思い出し桔梗にお辞儀をして式場から出て行ったのだった。

そして、風音は劉璋を捜しに成都城の近くにある、とある森にやってくる。

森の小川の近くに大きな石があり、そこには風音が思った通り、

捜し人が座って空を見上げていた。

この場所は一度だけ劉璋に連れて来てもらった場所で、子供の頃、忙しくなかなか会えない母である劉焉様と劉璋様の妹君劉循様と親子三人で来た大切な家族の思い出の場所らしい。

『我が君、捜しましたよ』

風音は劉璋に話しかけたのだった。話しかけられた劉璋は見上げるのを止め、ゆっくりと風音を見るのだった。

『やあ、ぱとらっしゅ。僕に何かようですか？』

左目に包帯を巻き、銀色の長髪を右側で纏めて三つ編みにし前髪は左目を隠すように伸ばして飄々とした態度でいるこの青年こそが、姓名を劉璋 字を季玉 真名を凜王^{りおう}。

益州牧劉焉の後継者である。

『我が君！ 私は、ぱとらっしゅ…ではありません！』

『…冗談ですよ。僕の可愛い風音、つい母上が言っていたことを思い出しましてね。』

自分の主の独特な雰囲気には流されてはいけないと思い

『我が君…追悼式場で皆様がお待ちしております。参りましょう！』

風音は小川のある中心にある大きな石に飛び乗り、凜王の手を握り立たせようとするが

『おや？僕の可愛い風音は少々怒っているのですか？ ……ああ、今朝…部屋に行かなかったからですか……安心しなさい、ここで結んであげますから』

凜王は握られた手を自分の方へと引つ張り、自分の前に風音を座らせる。

こつなつてしまうと、抵抗しても無駄ということを知っている風音は身を委ねるしかなかった。

『…いつ触っても心地いい。僕は風音の髪は好きですよ。このサラサラとした手触り、そして緋色の髪…まるで血の…やめましょう』

凜王は懐から櫛を取り出し、風音の髪をとかしていく。

『今日はごうしましよう……アレにしますか…』

『わ、我が君、あまり恥ずかしいのはお止めください！』

余程、恥ずかしい髪型にさせられたのか釘をさす風音であったが

『拒否権はありません。……僕の可愛い風音は……僕のですから』

怪しい笑みを浮かべ、またしても懐から青いリボンを取り出し風音の緋色の長髪を後ろで纏めて結っていく。

『…出来ましたよ。今日は母上に初めて教えてもらった、ぽにーてーるという結び方に見えました。』

『はあく、確か…馬のしっぽに似ているのでしたね』

変な髪型にされなかったことに安堵して、ため息を吐く。これが毎日だと大変である。

それを満足気に見た凜王は立ち上がり

『さて…行きますよ。場所を案内してください』

『はっ！ これで劉焉様も他の方々もお喜びになります！』

風音も立ち上がるが

『…勘違いしてますよ。僕が行く理由は、僕の可愛い‘妹’を慰めるだけですよ…』

と言い残し凜王は先に成都城に向かって歩き出すのだった。

そして、残された風音はそんな自分の主を追いかけるのだった。

第二席〜劉璋、登場すること〜（後書き）

オリジナル主人公設定

姓名

【劉璋】

字

【季玉】

真名

【凜王^{リオウ}】

性別

【男】

一人称

【僕】

武器

柳葉刀【古錠刀】

容姿

銀色の長髪を右側で纏めてゆるい三つ編みにしている。
目の色は、右目が朱色で左目が碧眼のオッドアイで左目に傷があり
普段は包帯を巻いている。服装は、黒と白を基調としたカンフー服。

容姿設定でした(^ o ^) /

第三席〜黄忠、軽蔑すること〜（前書き）

お気に入りが入りが12件もされていてビックリ！？でもかなり嬉しすぎます（*^o^*）

今回のお話しは紫苑sideを入れて見ました（^o^）
ウチの劉璋君は、かなり嫌われ者になる予定！
主人公なのにf^| ^；

第三席〜黄忠、軽蔑すること〜

【紫苑 side】

私は今、主劉焉様であり、憧れだった女性、晴香様の追悼式に親友である敵顔こと桔梗と娘の璃々と共に参列していた。

周りを見れば益州地方で名を馳せている豪族達の長や益州以外からもたくさん豪族が来ている。

しかし、この場に居なくてはいけない人物が居なかった。

劉焉様の息子で益州を治めることになる劉璋様だった。

妹君の劉循様は、先程までいたが、かなり辛いのだろう劉焉様の部屋に行くと言われて式場を出て行かれた。おそらく部屋で泣いているのだろう。

劉循様には同情するが、私の心ではある一つの感情で満たされていた。

その感情は――

——怒りである。

もちろん、劉焉様や劉循様、この場に居る人達にはない……この場に居ない劉璋様に対してだ。

『桔梗。劉璋様はどちらに？実の母の追悼式だっというのに……』

私は隣に居る桔梗に聞いてみるが

『それが先程から姿が見えんらしい……』
姿が見えない？ 大切な日なのに？

——最低だ。

『誰か捜しに行ってるの？』

『風音^{かひね}が血眼になって捜しておる。…見つけたら連れてくると言うておったは……』

『そう、ありがとう』

風音ちゃんは可哀想だ。あんな男の側近にさせられてしまったのだから。

それから少し経ってからのことだった。

あの男が風音ちゃんを連れて式場に入ってきたのだった。

【黄忠 side end】

凜王^{りゆうおう}は、風音に案内されて、式場に着いたのだった。

入ったと同時にいろんな人物に話しかけられるが

『…邪魔です』

と全く相手にせず無視をして奥へと歩いていくのだった。

だが、視線は誰かを捜しているように動いている。

『…居ませんね』

目当ての人物が見あたらないので凜王は仕方なくある人物達に近づいたのだった。

『お久しぶりですね。… 敵顔殿、漢升殿… つと、その娘さん』
『遅れて申し訳ありません。凜王様を只今連れて来ました』

二人が近づいて話しかけたのは、黄忠と敵顔、黄忠の娘の璃々だった。

『ご苦労だったな風音。そして、お待ちしておりましたぞ……凜……』

桔梗は凜王と呼ばうとしたが突然自分の唇に指を置かれて言いきれなかった。

『敵顔殿… 真名を呼ぶことをお止め頂きたい。昔とは違うのですか』
『う』

言い終わると凜王は桔梗から指を離す。

『…うむ。これは失礼しましたな… 劉璋様。』

桔梗は頭を下げるのだった。しかし、凜王は桔梗を無視して視線を紫苑の隣でしがみつきなから凜王を睨みつける少女に視線をやるのだった。

『おや？ 君は、漢升殿の娘さんでしたね。… 名前は』

『… 璃々。』

『そうでしたね。お久しぶりですね、璃々ちゃん。』

凜王は璃々を撫でようと手を伸ばすが、璃々はすぐさま紫苑の後

るに隠れ睨みつける。

『ふふふ…なんて憎たらしいガキなんでしょうね』

璃々に向けられたその言葉を聞いた紫苑は、凜王を睨みつける。

『おや？ すみません、つい本音が出てしまいました…以後気をつけますので……何か言いたげですね…漢升殿？』

『いえ、何も…』

笑みを浮かべて、紫苑に問うが何もないと睨みつけられながら返されるのだった。

ジツと自分を睨みつける紫苑の目を見て凜王は

『そんな目で見られると真っ赤に染まった、あの日、を思い出しませぬ、もう忘れましたか…漢升殿？』

『いえ…決して忘れられませんわ。今も鮮明に覚えていますわ！』

『そうですか、記憶力が良いのですね……僕はあるくならない日は、うる覚えです』

その言葉を聞いた瞬間だった桔梗が紫苑の腕を掴んで小声であることを言った。

『…紫苑ならぬ。劉璋様は我等の主となる御方じゃ、その御方に手

をだしたら、お主も璃々も処罰されてしまう…辛いだろうが我慢するのだ』

『くっ！…！…！ありがとう、桔梗。でも、大丈夫だから…分かってるから』

その言葉を聞いて安心したのか桔梗は紫苑の腕を離すが、紫苑の目尻にはうっすらと涙が浮かんでいたのだった。

そんな時だった、紫苑の後ろに居たはずの璃々が紫苑の前に立って涙を流しながら、腕を広げて

『お母さんをイジメないで！』

泣きながらもしっぴかり凜王を睨みつけ、母を守ろうとしていたのだった。

だが、そんな母想いの璃々の行動は凜王にとって、どうでもいいことであつた。

それどころか何かを思い出して

『ああ…涙で思い出しました。‘夜空’はどこですか？ 僕の可愛い妹は…』

未だ睨みつける璃々と紫苑を無視して桔梗に問うと

『劉循様なら、母君の劉焉様のお部屋に行くと言っていました。』

『…そうですね。それでは僕は可愛い妹を慰めに行くのでこれで失

礼します』

歩きだそうとするが桔梗に呼び止められるのだった。

『なっ！ 劉璋様！ 母君の追悼式には参加はしないのですか！？』

そして、凜王の答えは

『必要ないですよ。もう、別れは済ませてありますから…それに今は夜空が心配で他のことはどうでもいいんですよ』

再び凜王は歩き出す。

『お待ちください、我が君！』

風音も着いていこうとするのだが

『風音は追悼式に参加しなさい。私の分までお祈りを頼みましたよ。』

それだけを言って、式場を出て行ったのだった。

そんな、凜王を風音、桔梗、紫苑、璃々はただ黙って見送ることしか出来なかったのだった。

第三席〜黄忠、軽蔑すること〜（後書き）

オリキャラ紹介その1

このキャラは友人が考えてくれました（^| ^）v

姓名

【張任】

字

【飛燕】

真名

【風音】かざね

性別

【女】

一人称

【私】

武器

薙刀【燕首】

容姿

髪の色は緋色で背中まである長髪を毎日違う髪型にしている。
目の色は蒼色で目は少しいり目である。

服装は上半身は胸の部分をサラシで巻いただけで、下半身は赤い袴で模様がある。

容姿設定でした（*^o^*）

第四席へ劉璋、決意することへ（前書き）

お気に入りか33件になってる）o（

やった、やったよ！

と言っわけでお気に入りしてくれた人達ありがとっございませす
^o^）

第四席〱劉璋、決意すること〱

――劉焉私室

ここでは、ある一人の少女が今は亡き人物の床に顔をうずくませて泣いていた。

『…母上え。なぜ、夜空達を置いて先に逝っちゃうの…』

この少女は、亡き劉焉の娘であり、劉璋の妹である。

姓名は劉循 字は幼玉 真名はトク夜空。

彼女は自分以外に誰も居ない真つ暗な部屋で母との思い出を思い出していた。

母、劉焉は益州牧という立場で病気になるまで、寝る間も惜しむほどに忙しい生活をしていた。朝から夜まで執務室から出て来ない日もあったり。

だが、どんなに忙しくても母は月に一回、必ず休みをとって疲れを取って一日中、子ども達と遊んでくれていた。

母と兄と一緒に買い物に出かけたり、成都城近くにある森へ散歩に行ったり、とつても短い時間でも夜空にとつては充分だった。

しかし、これからは短い時間どころか永遠に大好きだった母に会えないのだ。

そんな時だった、真つ暗な部屋の扉が開いて光が射し込んだのは、そして開いた扉から入ってきた人物は

『あんちゃん？うう…あんちゃん…！』

夜空の兄である、凜王りんおうであつた。

夜空は、兄の姿を見るとすぐに立ち上がって駆け寄って抱きついたのでつた。

『おやおや…可愛い顔が台無しですよ、こんなに目を腫らして…たくさん泣いたのですね』

凜王は、抱きついてきた妹を優しく抱きしめ、母と同じ栗色の髪を穏やかな表情で撫でるが心では、驚いていた…普段は泣くこともなく持ち前の笑顔と明るさで周りを知らぬ間に笑顔にしている妹が、今は笑顔も無く、ただ泣きながら自分に抱きついていること、そして同時に母が妹にとつてどれほど大きな存在であつたことが

(母は…強いですね……僕では母上の変わりにはならないらしい…少し自信があつたのですが…)

昔から忙しい母に変わり、かなり可愛がりながら妹の面倒をしていたため、母が居なくなっても自分が居れば大丈夫かと思っていたが、決してそういうことにはならないと分かったのだった。

『夜空、鼻水がでていますよ…ほら、チーンしてください』

凜王は一枚の布を取り出し妹の顔に布をやり、夜空は大人しく鼻をかむのだった。

それが終わると夜空が兄に話しかける。

『あんちゃん…母上が亡くなって、夜空とあんちゃんだけになっちゃったね。昔は父上や大きいあんちゃん達も居て賑やかだったけど…みんな死んじゃって…母上とあんちゃんと夜空の三人で頑張ったけど…二人になっちゃっても…頑張れるかな？』

夜空が言ったとおり、昔は凜王達の父や三人の兄が居たのだが、10年前に‘血の粛清’事件の時に四人とも死んでしまったのだった。

そして、妹の問いかけに凜王は

『大丈夫ですよ…三人から二人になっただけで何も変わりません。…夜空は、僕の命をかけて守りますから…』

自分が守るからと言って髪を撫でてやっている、とある事に気がつく。

『おやおや…安心したのでしょうか？ 器用に立ったまま寝ていま

すね……僕の妹ですが立ったまま寝るとは奇妙ですね』

と言いつつも、凜王は起こさないように抱き上げる、お姫様抱っこの状態だ。

そのまま、母が使っていた寝台まで近づき、そこに夜空を横たわらす。

『おやすみなさい。これから、僕達は母上が必死に守ってきた物を守らなければなりません。寂しく苦しい日々が続くでしょうが……今だけは、母上の温もりに包まれて寝なさい』

掛け布団を優しく掛けるのだった。そして、そのまま部屋を出ようとした時にある物を見つけた。

それは、机の横に立てかけてあった一振りの剣であった。

『これは……古錠刀ですね……、そう言えば母上が生きてる時言っていたね。自分が死んだ時は古錠刀を僕に譲ってあげると………母上、それではこの剣は、僕が貰いますね』

古錠刀を手に取り腰に差して部屋の扉に向かって歩き出す。

扉の取っ手を掴んだ時、何かを思い出したように

『母上……言い忘れたことがあります。』

母上は益州牧劉焉として外交や政治手腕で益州を守って来ましたが……悪いのですが僕は違う道を行かせてもらいます。

圧倒的な力で益州をいや……大陸全土を掌握します。たとえ暗愚と呼ばれてもそれが僕の道……霸道ですので』

それだけを今は亡き母の部屋で言いつつ凧王はそのまま、部屋を出て行ったのだった。

第四席〜劉璋、決意すること〜（後書き）

オリキャラ紹介その2

姓名

【劉循】

字

【幼玉】

真名

【夜空】
ヨソキ

性別

【女】

一人称

【夜空】

武器

連弩【蝶姫】

容姿

髪の色は栗色で髪は背中にまである癖っ毛長髪で前髪を左に流して左目が隠れて赤い羽が着いた黒いベレー帽をかぶっている。

目の色は兄の劉璋とは違い、両目朱色である

服装は、浴衣ミニで色は黒でピンク色の蝶の模様があり、帯は赤色。

女の子特有の胸は星（趙雲）と同じぐらいの大きさである。

容姿設定でした（*^o^*）

第五席〱劉璋、益州牧になるのこと〱（前書き）

お気に入り40！！マジすか！どんどん増えてる！

本当に感謝してます（*^o^*）

感想もお待ちしております！

皆様にお願ひがあるのですが、桔梗、紫苑、雪蓮の年齢を教えてください
ださいm（　　）m

もう少し、したら反董卓連合の話しに入りたいと思います！

第五席へ劉璋、益州牧になるのことう

――成都城・玉座の間

劉焉の追悼式から三日後、成都城にある、玉座の間では新たに就任した益州牧とその配下の将達が集まっていた。

なぜかと言うと前益州牧が亡くなり、新たに益州牧が決まったため、これからの方針を決めるための会議が行うためである

『これで全員ですか…よく集まってくれましたね。』

僕が前益州牧劉焉の跡を継ぎ、新たに益州牧になった劉季玉です。と言っても見知った顔ばかりですが…』

凜王りゆうおうが言ったとおりこの場には、桔梗ききょう、紫苑しおん、夜空よぞら、風音かぜねと凜王が座る玉座の右と左側に立って居る二人の青年達のみであった。

その言葉に疑問を持った桔梗はあることを尋ねる。

『劉璋様、先程これで全員と申しましたが、七老臣達がまだのようじゃが』

桔梗が言った、七老臣達とは前益州牧劉焉の頃から仕えている七人の重鎮達である。その七老臣達は会議には必ず参加しているお偉いさんなのであるが、その姿が見えないのだ。

『ん？ あの老人達ですか……あの人達なら来ませんよ』

『来ないとは？説明してもらえると助かるのだが』

『説明ですか……まあ、見れば分かりますよ。誰かアレを！』

凜王が言つと、7人の兵士が木の板を持ちその上には何かが乗せられ黒い布が掛けられてある。

『…夜空来なさい』

それと同時に妹を呼ぶ。

『…？ どうしたのあんちゃん？』

夜空は言われたとおり兄に近づくと、腕を掴まれ兄の方に引つ張られ膝の上に乗せられる。

『え？ なに？ あんちゃん、みんなの前で恥ずかしいよ！って何で目隠しするの！？』

『ちょっと、夜空には刺激が強すぎますので…少し我慢してください』

凜王は懐から布を取り出し、妹に目隠しするのだった。

この時、誰もが思った凜王が激愛する妹に見せたくない、あの黒い布の中身の正体を

『どうします？ 見ますか？』

皆の様子を見て、黒い布の中身を確認するかと聞く。

本当は、予想したとおりの物があるのなら見たくはないが、一応、確認するため桔梗達は頷くのだった。

『では、兵士の皆さんお願いします』

凜王が言つと、兵士達は黒い布を引き剥がす。

そして、黒い布が引き剥がされた場所には皆が予想した物があった。

そう、生首が…。

それを見た桔梗と紫苑は

『七老臣ではないか！？ なぜじゃ！？ なぜこんな事に！』

『劉璋様！ これはやり過ぎではないでしょうか！？』

その返答をするため凜王は膝の上に乗る妹の耳を塞ぎ、こう言った。

『七老臣だが高んだけ知りませんが、母上が死んですぐに言い寄ってきましたね。…アレをしる、コレをしるとうるさいので始末させました…僕の信賴するこの二人とばとらっしゅにね』

凜王は、左右に居る青年と眼前に居るばとらっしゅ、こと風音を見る。

『本当なのか！？ 風音！？』

桔梗は風音に掴みかかり本当かどうか問うが

『我が君、凜王様が言ったとおりです、私は我が君の命とあればどんなこともします……我が君が私の命を欲するなら、喜んで捧げましょう』

張任こと風音は、主である劉璋こと凜王の命とあれば己の命を捧げるほどに忠誠を誓っているのだ。

『ふははは！ 僕の可愛い風音、そこまで思っていてくれるとは嬉しいですよ』

風音の答えが気に入ったのか凜王は笑みを浮かべるのだった。それとは対照的に桔梗は悲痛の表情を風音に向け、離すのだった。

『でも、うるさいからって益州のために貢献してくれた七老臣達を殺さなくても！ 今は亡き劉焉様が知ったら草葉の陰で泣いてしまします！ それに忠臣を殺したあげく、見ず知らずの男を二人も側

近になど!』

紫苑は、前に出て跪き臣下の礼をしながら凜王の目を真つ直ぐと見るのだった。

しかし、紫苑の必死な訴えも凜王には届くことはなかった。

『君達は知らなすぎるのです。…七老臣? 表では、前益州牧劉焉を良く助け、益州の民のために尽力すると言われていますが実際は違います。』

裏では、母、劉焉がすることを良く思わず妨害をして困らせ、山賊や盗賊から賄賂を貰い悪事をして目をつぶり民を苦しめる。…それが、七老臣と呼ばれが老人達なのですよ。

…己の利ばかりを考え私利私欲に走った、僕の義理の兄達とあなたの旦那と同族と言うわけですよ、漢升殿』

凜王は紫苑を睨みつけるのだった、そして紫苑はただジツと我慢をして顔をふせるのだった。

その姿を見た、凜王はフツと小さく笑い話しを続けるのだった。

『ああ…そういえば、この二人を紹介していませんでしたね。…彼等は母上の相談役兼友人です。』

左慈と于吉と言います、この二人は引き続き、僕の相談役兼左慈は將軍に于吉は軍師をしてもらいますので、仲良くしてあげてください』

左右の二人を紹介すると、左慈と于吉は小さく礼をするのだった。

『兵士諸君、その汚い七つの生首を成都城外に晒してください、己の私利私欲に走った愚か者として』

兵士達に命令をすると、すぐさま兵士達は退場するのだった。

『まあ、余談はこの程度にして本題に入りましょう。…漢升殿お立ちになって元の位置に戻ってください。』

『…御意』

紫苑は言われたとおり、立ち上がり桔梗の隣に戻っていくのだった、しかし、その拳は強く握られ震えていたのだった。

凜王は紫苑が元の位置に戻るのを確認すると、ずっと膝の上に座らせていた妹の耳を己の手で塞いでいたが手を離し、目隠しも取るのだった。

『うう…あんちゃん、酷いよ！ 夜空に目隠しして、耳も塞ぐんだもん、何も分かんないじゃん！』

『すみません、夜空にはあまり見せたくない物でしたので』

『わかった！ えっちいゝ物だったんでしょ！』

『バカを行ってないで、戻りなさい』

軽く髪を撫で元居た、位置に戻らせるのだった。

そして、凜王達は本題である益州を治める劉焉軍改めて劉璋軍の

方針を決めるために会議が始められるのだった。

第六席〜左慈、言っていけないことを言ってしまうのことで〜（前書き）

感激です！お気に入り74件、しかも感想も貰えて、嬉しすぎる）

次回こそは劉璋軍の方針を決めますので！その後は人材検索で犬嫌いのあの子が登場する予定

感想、指摘、待ってます（＾Ｏ＾）

第六席へ左慈、言っていけないことを言ってしまうことへ

『さて…そろそろ今回集まっていたいただいた理由である、我等の今後の方針について話し合いまししょうか』

劉璋こと凜王が改めて言うと、先程とは違い静寂が漂う。

『さて…今後の方針と言いましてもいろいろありますが、どうしますか？ 何か提案があったら言ってくたさい』

凜王が言うと、待ってましたと言わんばかりに嚴顔こと桔梗が一步前へ出て

『劉璋様、進言させてもらいますぞ！ 前益州牧劉焉様がお亡くなりになったばかり！ 今は亡き劉焉様の方針であった、益州の内政に励み、近隣の州牧や豪族と友好関係にするべく、外交に専念することを進言致します！』

桔梗が言ったとおり、前益州牧劉焉は、政に関してはかなり突出した能力を持っていた。ならばその人物が死ぬまで保守してきた方針を継ぎ、内政、外交に専念しようということだった。

『内政に外交…これまで母上がやってきたことですね…』

『左様であります！ 劉焉様の息子で跡継ぎである、劉璋様が劉焉様と同じことをしても誰も文句を言うことはござらぬ！』

桔梗は、凜王に方針を決めさせるため後押しするが凜王の答えは

『……却下します』

前益州牧であり、母である劉焉が死ぬまで保守してきた方針をあ
つけなく拒否したのだった。

この答えに納得が出来るはずもなく、桔梗は反論を言おうとしたが

『確かに母上の方針は素晴らしい、国を想い、民を慈しみながら益
州を守ってきた、その方針はいいですが……今は、その必要はない』

凜王は玉座に座りながら足を組み直し、笑みを浮かべ、母が守っ
てきた方針を必要ないと断言したのだった。

『必要……ない？ どういうことなのか説明してください！』

『ふふふ、そう怖い表情で言われなくてもね。……ですが、この先の
説明は我が軍の新しい軍師となつた于吉に説明してもらいましょう。
……さあ、軍師らしい働きをしてくださいね』

『はっ！ 仰せのままに……』

凜王は隣に立っていた于吉に自信に変わり説明させるのだった。

【敵顔side】

儂は、劉焉軍から新たに劉璋軍となったため、今後の方針について話し合っていたのだが、信じられぬ、言葉を現益州牧劉璋様から聞いてしまった。

儂が、これまで通り、劉焉様が保守し守り続けていた、内政と外交を専念することを進言をしたが答えは

『……………却下します』

ありえない答えであった、儂は劉璋様は亡くなられた劉焉の意志を継ぎ、益州を守っていくのだと思っていたが、違ったらしい…………

激しく動揺した儂：いや、儂だけではない隣に居る黄忠（じゆうしゆう）こと紫苑（しおん）と張任（ちやうじん）こと風音（かぜね）は驚いた表情をしていた。

劉循（りゆうじゆん）様こと夜空（よんくう）様は、何も分からず、話しについていけずに、失礼ながら、ボケツとしているかと思っただら真剣な表情をしていた：あの二人は兄妹、同じ思考なのだろうか？

その後だった、劉璋様が隣に居た、新たに軍師となった導師服を着て眼鏡をした男に説明をさせ始めたのは…

【蔽顔 side end】

凜王に言われて眼鏡をかけた男が一步前へ出る。

『ご紹介されました、于吉と申します。凜王様の相談役兼軍師となりますのでよろしくお願いします』

于吉は、一例をして挨拶をした、その時だった。

『貴様！ 我が君の真名を軽々しく呼ぶとは！』

護身用の剣を抜き、于吉に斬りかかった。

しかし、身命をかける己の主の真名を勝手に呼んだ相手を殺すため、剣を振るったのだったか、剣はもう一人の男…左慈によって止められていた。

『けっ！ ……血の気の多い奴だぜ』

左慈は振り下ろされた剣を素手で掴んでいたのだった。

『な…に？ 剣を素手で？ ……しかも無傷だと！？ 何なんだおまえ達は！？』

殺す気で剣を振り下ろしたのだ、それを素手で簡単に止められては誰だって驚く。

『助かりましたよ、左慈。左慈が居なくては今頃、首と胴体が真っ二つでしたよ……お礼は体で払いましょう!』

于吉は、左慈に襲いかかるが

『うぜええ!!』

『へぶしツ!!』

顔面に蹴りをいれられるのだった。

于吉を蹴り飛ばした後、左慈は風音の方を見る。

『…その程度じゃ、こいつの護衛はオレがやった方がいいかな?』

『ふざけるな!! 我が君の護衛は私だ!! 誰が貴様などに譲るものか!』

まさに一触即発の時だった。

玉座に座り、クスクスと笑っていた凜王が立ち上がり、二人のもとへ歩き出す。

『いいのですよ、風音。この二人には、僕の真名を許しているので

す
』

『そ、そうなのですか！？ …私の早とちりで軍議を乱してしまい
申し訳ありません！ …どんな罰でも受けます』

自分の早とちりだと知り、慌てて頭を下げる。もちろん、左慈に
ではない。

『ふふふ…安心しなさい、僕の護衛は風音以外考えられませんから
…頼りにしてますよ？』

『は、はい！ …命に代えても！』

凜王は返答に満足したのか笑顔を浮かべ風音の耳元まで近づき

『僕のことを、こんなにも思っていてくれるとは、嬉しいですよ。
ですが…早とちりはいけませんね…罰を与えます、今夜は僕の部屋
に来なさい。…たっぷり可愛がってあげます』

甘くささやき、耳元をふう〜と息を吹きかける。

『ひゃ、ひゃいー！』

風音は気の抜けた返事をして顔をボンツ！ と赤くしたのだった。

それを見て、イタズラが成功した時のような怪しい笑みを浮かべ
る凜王。

凜王はそのまま、左慈のもとへ行き。

『風音を茶化するはやめなさい。左慈は夜空の護衛に命じたはずですよ?』

『…ふん！ わかってる。少し言ってみただけだ』

『そうですか…夜空を頼みましたよ？ 夜空!』

振り返り、妹の真名を呼ぶ、呼ばれた本人は

『ん？ なあに？ あんちゃん?』

『この人があなたの護衛ですから、挨拶しときなさい』

そう言われ、夜空はヒョコヒョコと左慈に近づき、上から下まで、隅々まで見る。

『あなたさ…なんか…』

『な、なんだ!?!』

『…スケベで変態っぽい!』

妹、夜空の左慈への第一印象スケベで変態。

『ス、スケベ!?!? オレのどこが!?!?』

『だって、紫苑様をいやらしい目で見た。』

夜空は紫苑を見ていたと左慈に指摘するのだった

ちなみに夜空が紫苑を紫苑様と呼ぶ理由は、小さい頃から紫苑は夜空のお世話係と教育係で、世話をしたり、弓術を教えたりしているため、夜空にとっては憧れの女性なのである。余談ではあるが、桔梗は兄である凜王のお世話係であり教育係である。

『み、見てねえー！！ そりゃ、ちょっと綺麗でデケエーなあって思ったが……しまった！』

『まあ！ そうなの？ そんな目で見られてるなんて。まだ、私も捨てたもんじゃないわね』

紫苑はクスクスと笑う、この状態を見てみると、さっきまでピリピリしていたこと嘘のようだ。

『デカイ！？ やっぱり、あんだ、紫苑様の胸を見てたのね！？ スケベ！ 変態！！』

左慈は夜空の罵声を浴びて、どんどん額に青筋を立てて、いけないことを言ってしまうのだった。

『オレは変態じゃねえ！？ どっちかというと、こいつの方が変態じゃねえか！！』

左慈はビシッと、凜王を指を指し手高らかに言った。

その瞬間である、空気が凍ったのは、原因は皆、薄々いや確実に思っていたことを言ってしまったからである。

『あ、あなた、度胸があるわね…ソレをあんちゃんに言っなんて…』
『へ?』

その時である。左慈の肩が掴まれたのは

『げえ!? 凜王!?!』

『ほう…僕がスケベで変態ですか…いい度胸です。さあ逝きますよ、お話しをしましょう』

凜王は左慈の首根っこを引っ張りながら、玉座の間にある個室へと繋がる扉へ歩いていくのだった。

『やめろ! 離せええ!』

左慈の懇願も虚しく、扉は開かれ、閉じられたのだった。

それを見送った面々は

『スケベで変態だから、悪いのよ!』

と言う…妹、夜空。

『こ、今夜、我が君にあんなことやこんなことを…』

今夜のことを考え、妄想する風音。

『ふふふ…ふふふ…左慈……………もつと、私をイジメてください』

気絶したはずなのに、キモイことを言っている于吉。

そして、重鎮二人は

『紫苑よ。変わってしまったかと思っておったが、ああいう顔の劉璋様を久しぶりに見たの…やはり、まだ許せぬか？』

桔梗：悪いけど私には、許せないわ。…たぶん、一生ね』

唇を噛みしめ、拳を強く握りしめて言ったのだった。

『…そうか』

桔梗はそんな親友を見て、小さな声で言ったのだった。

結局、一時間後には凜王と左慈は戻ってきて、左慈はやつれた顔をしていたのだった。

第七席〱劉璋、方針を決めるのこと〱（前書き）

お気に入り91件ありがとうございます（*^o^*）

しかも、感想ももらえて嬉しいです

と言っことでどうぞ！

素直になれない子って可哀想なり（T―T）

第七席〱劉璋、方針を決めるのこと〱

『さて、いろいろとありましたが、今度こそ…方針を決めたいと思います。…于吉』

先程の件を皆、なかったことにして方針を決めるため話し合いが再開されたのだった。

なかったことに、されたのが少し可愛そうなので、左慈の現状だけ教えよう。

左慈は、真つ白に灰になっていた。

そんなこんなで、復活した于吉に凜王は、説明するようにと言うのだった。

『先程、凜王様が言ったように…内政、外交を専念する方針はもう、我等には必要ありません。今、必要なのは軍事力です！』

于吉は、臣下である。紫苑、桔梗、風音に言い放ったのだった。

『軍事力？ なぜじゃ！？ 州に居た賊はほとんど壊滅させたはずじゃ…』

桔梗は于吉に向かって反論を言うが、于吉は薄く笑い

『確かに益州の山賊、盜賊は、劉璋軍猛將…嚴顏殿、黄忠殿、張任殿達の手によつて討伐されましたが……益州の外はどうでしょう？』

『益州の外…？』

『益州周辺では、まだ賊が暴れています。あなたもご存知でしょう…黄巾賊の事を？』

黄巾賊とは…張角、張梁、張宝の三人を中心にして黄色い布を身に付けて各地で賊行為をしている民達である。

後漢中央が宦官達の私利私欲によつて腐つたことが原因で各地で暴動が起こつたのだつた。

『知つておるが…まさか、黄巾賊を討伐するためにするのか？』

『いえ、黄巾賊は時が経てば各地で名をあげている人達が鎮圧するでしょう。凜王様が軍事力を高める理由は、この先必ず起こる…群雄割拠に備えるためです』

于吉は、黙つて玉座に座っている凜王はチラツと見た後、眼鏡をくいと上げる。

『…群雄割拠？ 黄巾賊が討伐されても乱は治まらなと言つことかの？』

『ええ、こうなつてしまつては最後…何度も乱が起きて、国は疲弊していくでしょう。なら、それを回避するためにはどうするべきか？ 答えは簡単です…力がある者が頂点に立ち国を一つに纏める……ここまで言えばお分かりでしょう？』

于吉はニヤリと笑い、対照的に桔梗達は驚愕の表情をあらわにする。

『力がある者が頂点に……劉璋様は……漢を裏切り、自らが頂点……帝になると言うことでしょうか？』

桔梗の隣に居た、紫苑が口を開く

『その通りです。ですので今のうちに兵を集め、訓練し軍事力を高めるのです。如何ですか凜王様？』

于吉は凜王を見る。そして凜王はクスツと笑い

『……まあ、合格というところですね。……と、言うことなので皆さん僕の方針に従ってもらいますよ？』

言うのが簡単に了承するはずもなく

『劉璋様！ なぜじゃ！？ 亡き劉焉様は漢の忠臣！ なぜ子のあなたが漢を劉焉様を裏切るようなことを！？』

『……敵顔殿。 知りませんね、母上が勝手にしていたことです……それなのに、なぜ同じ事をしなければならないのです？』

『……っ！ それは……』

『……もういいでしょう。 方針などは最初から決まっていますしたが……一応、臣下の進言も聞かなければならないので……さあ、解

散です、軍議は終わりです』

凜王は身勝手に軍議を終わらせ、玉座の間から出て行ったのだった。

それを見た、将達は左慈と于吉を残し、無言で玉座の間を出て行ったのだった。

そして、残された左慈と于吉は

『なんて言うか…アイツ、口下手って奴か？ 正直に晴香が守ってきた物を守るためって言えばいいのに…』

復活した左慈は、于吉の隣に行き話しかける。

『そうですね……それにしても…合格ですか…わざわざ、ああ言えと事前に私に命令をして……なぜ、あそこまで嫌われようとするのですかね？』

『さあな…俺達には関係ねえよ……俺達はアイツを凜王を、北郷一
刀の抹殺に利用するだけだ…』

『…そうですね』

二人は、闇の中に消えていくのだった。

第八席〜劉璋、謎の青年と出会ったこと〜（前書き）

お気に入りが増え100件越えました！（　　）

今回のお話しは、アポリオンさんが作ってくれたオリキャラが少し
出ます

次回のお話しでガッツリ出ますので楽しみに（＾w＾）

第八席く劉璋、謎の青年と出会つること

軍議を一方的に終わらせた劉璋こと凜王は、自室に戻り、イスに座りながら、窓から見える月を見ながら徳利に入った酒を一人で飲んでいた。

『今日は、満月ですか……そういえば、だいぶ前に左慈が満月の夜、僕に贈り物があると言っていましたね』

そう一人で呟いた時だった、満月と光り輝く星達がある夜の空に青白い流星を目にした、そのまま青白い流星は成都城付近の森に音も立てずまばゆく光って墜ちたのだった。

『青白い流星？ あの方角は……ふふふ、なにかありそうで面白そうですね』

凜王は立ち上がり、己の武器である、古錠刀を腰に差し、片手に徳利をぶら下げ部屋を出て行った。

―――成都城付近の森

凜王は、青白い流星が墜ちたであろう森に護衛を付けずに一人フラフラと歩いていった。

益州を治める州牧が一人で歩くことは許されず、成都城から出ることはできないのだが、凜王しか知らない抜け道があるようで、そこから度々抜け出して森に散歩に出かけることがあるのだ。

『…確か、この辺りのはずですが…』

その時だった、前方の茂みがガサガサと鳴ったのは…凜王が音が鳴った方を見ると十数人の男達が茂みから現れたのだった。

『賊…ですか、まだこの辺りに居るとは……しかも、黄色の布を巻いた黄巾賊ですね』

茂みから出てきた、賊達も凜王に気づいたようで

『ああ？　なんだてめえは？　まぶしい光がこの辺りに墜ちたと思つて見にきたら…へへへ、こんな上玉に会えるなんてよ』

賊達は、先程の青白い流星が墜ちるのを見てやって来たらしい。それに、この場に居た凜王を見て女だと勘違いしているようだった。

賊が間違えるのも無理はない、凜王は銀色の煌びやかな長髪を右側で纏めて緩い三つ編みで少しつり目だが中性的の顔立ちをしていて、今の服装は就寝前だったので寝間着である。

『ぐへへ…少し、痛み物のようだが…犯しまえば関係ねえ』

賊のリーダーらしき男が凜王の左目に巻いてある包帯を見ながら薄汚い笑みをこぼし舌なめずりをする。

『……………』

凜王は、賊達を無視するように空を見上げ、腰に差してある古銃の柄に手を触れる。

『お？ 怖くて喋れないか？ へへへ、無理しなくていいぜ、すぐに可愛い声を鳴かしてやるからよ』

賊達のリーダーらしき男が凜王を掴もうと腕を伸ばした時だった。

『ぎゃああああー！』

後ろに居た賊の一人が断末魔の叫びをあげ、前のめりに倒れたのは

『な、なんだ！？ どうした！？』

十数人の賊達が、声がした方を見て啞然とする、仲間が血しぶきをあげながら倒れていたからだ。それと同時にあることに気づく、倒れた仲間の奥で誰かが立っているのを、しかし運が悪く月に雲がかかり暗くてよく姿が確認できない。

そうしているうちに。

『ぐああああー！！？』

『ひいひいー!?』

『や、やめろおおー!?』

賊達は、謎の襲撃者の姿を確認する前に襲撃者の手によって動かぬ屍に変えられていくのだった。

一人、また一人とどんどん屍に変えられていくのを見ていたリーダーらしき男は怖くなり凜王の横を通り過ぎて逃げだそうとするが

『…待ちなさい』

凜王に足かけをされて、盛大にこけたのだった。

『ぐへ!? な、なにしゃがる!?』

『逃げるのはいけませんね。人を女呼ばわりして…』

『女呼ばわり!? もしかして男なのか!?』

驚愕の表情を賊達のリーダーらしき男が顔に表すが

『…ええ。僕は男ですよ……それより…僕を女と間違えた罪は重いですよ?』

そう、凜王は男に女と間違われるのが大嫌いなのである。

容姿とおとなしい性格のため昔から女に間違われるが、その度に女と呼んだ男達は屍に変えられていく、以前に50人で編成された小隊の男兵士達の間で凜王が女みたいと噂していた時は、全員が半殺しにされた。女‘みたい’が付いていたので半殺しだけで済ん

だが、‘みたい’が無ければ全員殺されていただろう。

賊達のリーダーらしき男は完全にアウトだ。完璧に女と間違えたからである。

『…罪を償いなさい』

凜王は、古錠刀を鞘から抜刀し倒れている男の右足の腱を斬る。

『ぐあああー！！』

男は叫び声をあげるか、何とか逃げようと這いずるが

『……………』

今度は左足の腱を斬られる。まだ、これだけでは終わらなかった…右足の太ももを斬られるのではなく刺される。

『ぎゃあああああー！！…や、やめてく…れ』

賊達のリーダーらしき男はそう言って、激痛で意識をなくすが

『…誰が、気絶していいと？』

凜王は左足の太ももを古錠刀で刺す。

『ぐっ…ああああ』

激痛で再び、目を覚ます。この後は激痛で気絶し、激痛で目を覚ますの繰り返しであった。決して死ねぬように急所を外しながら刺していくのだった。

『……………』

凜王は言葉は発しないが、顔には笑みがこぼれていた、まるで子供が無邪気に遊んでいるような笑みを。

その時だった、激痛で苦しんでいる賊達のリーダーらしき男に上空から降りてきて人物が居たのだった。

その人物は降りてきたと同時に血まみれで倒れている男の喉元に不思議な形をした剣を突き刺していた。

不思議な形をした剣を血まみれの男の喉元から抜きながら

『お前…やりすぎじゃないのか？ 殺すなら時間をかけずに一瞬で殺すべきだ』

手に持っている不思議な形をした剣を鞘にしまう。

謎の人物が言い終わったあと、雲に隠れていた月が露わになり月の光で、謎の人物の姿が見えるのだった。

シンプルな形の般若の仮面、腰から下げた倭刀、逆にきつちりとしたビジネススーツ、ブランド物のショルダーバッグ。

凜王がいや、この時代の者全てが知るはずがない面妖な格好をした青年であった。

『…鬼の面？ ふふふ…なんと面妖な…。それよりやりすぎ？』

あなたが十数人の賊を始末するのを遊びながら待っていただけです。

…なぜ、僕を助けたのですか？』

凜王も血まみれになっていた男から古銃刀を抜き、鞘に納める。

『……偶然、お前が囲まれているのを見つけて、気まぐれでアイツ等を殺したただけだ……助けてはいない!』

気まぐれで殺しただけ、だと言い放つ謎の青年。

『気まぐれですか……まあ、いいでしょう。それより、あなたはこの世界の人間ではありませんね?』

特に驚いた表情もせず、笑みを浮かべて質問をする。

『さあな……気づいたらここに居た』

『答えにはなつてはいませんが……細かいことはいいでしょう。……単刀直入に言います、行くところがないのであれば……』

『………僕のものになりなさい』

凜王は会ったばかりの謎の青年に手を差し伸べるのだった。

――― 成都城・凜王の部屋

凜王の部屋の前では、張任ちやうじんこと風音かぜねが扉の前に立って居た。

『に、逃げるな、私！ 凜王様が私を所望されているのだ！ 凜王様のためならば初めてでも怖くはない！』

寝間着姿でほのかに湯の香りがする風音は、何かを決意して、凜王の部屋の扉を叩く

『り、凜王！ 風音です！ 言われた通り参りました！』

声をかけるがまったく返事がない。

不思議に思い恐る恐る扉を開くと部屋には、凜王どころか人っ子一人居なかった。

その状況を見た風音は確信した放浪癖がでたのだと。

『…またか。 こうしてはおれん！ お一人では危ない、すぐに探しに行かなくては！』

風音は来た道を戻り、兵士を連れて凜王の探索に出たのだった。
…少し、残念そうな顔で

第九席〜劉璋、拾うのこと〜（前書き）

皆様の感想が励みになります（*^o^*）本当にありがとうございます

次回のお話しは、桔梗と焰耶が出る予定！お楽しみに！

第九席く劉璋、拾うのことく

『おや？ 祥吾、あなた、お酒はいける口ですね』

『ああ、向ここの世界で飲んでいたからな』

劉璋こと凜王と謎の青年、改めて岩見祥吾は、二人で、賊達が血を流し倒れている近くの木にもたれ掛かって、凜王が持ってきていたお酒を飲んでいた。

凜王がなぜ青年を祥吾と呼んでいるかというのと、祥吾は凜王の誘いを承諾し名を教えあっていたのだった。

『それにしても、凜王。 お前、よく死体が目の前にあるのに平然として酒を飲んでられるな…気持ち悪くならねえのか？』

祥吾は、凜王が持ってきた二つのお酒の入った徳利の片方を手に持つと、般若の仮面を口元がでるまでずらし、お酒を飲む。

『…祥吾が言っている、意味が分かりませんね。 目の前にあるのはただの肉の塊、気持ち悪くありません…ですが、見飽きました。 …でも、僕は肉の塊には興味ありませんが…血は好きですよ？ …血の独特の色や臭い、胸の中にある何かを掻き立てられる』

凜王は、徳利を口に付けお酒を飲む、そして不敵な笑みを浮かべるのだった。

『…変わった奴だ』

と祥吾は言うが

『…変わっているのはどっちでしょうね？ 鬼の仮面を着け、不思議な衣に包まれ、死体に囲まれ、知らない世界に飛ばされても動じない、自分で言うのはあれですが…こんな変人の横に居るのに平然としている。 変わり者はどっちでしょうね？』

『…さあな。 そんなことよりそんな変わり者を軽々しく迎えているのか？』

『迎え入れた？ 違いますよ、落ちていたから気まぐれで拾っただけです。 拾ってあげたのですから、力を尽くしなさい』

『…勝手なことを、こっちは気まぐれで拾われてやっただけだ…せいぜい、裏切られないように努力しな！』

二人ともひねくれた事を言うが口元には、笑みが浮かんでいた。

『……言い忘れました。 祥吾天の世界の名を捨てなさい。 天の世界の者が益州に降り立ったとなると、注目を浴びてしまい動きづらくなります』

祥吾が天の世界から降り立った、知れ渡れば各地の雄に注目を浴びているいと動きづらくなるため、凜王は祥吾に言ったのだった。

『構わん、別に名前に執着はない。…好きにつける』

祥吾は迷いもせず、簡単に了承してしまった。

『では…姓を孟 名を達 字を子敬 真名を祥吾…と名乗りなさい…』

『孟達…分かった。…というか真名って、なんだ？』

祥吾が居た世界では、真名などあるはずもなく、何なのかと凜王に聞くが

『……自分で調べなさい』

と言われてしまったのだった。

『拾ったんだから、最低限の世話をしろよ』

『めんどくさいから嫌です。…それより、迎えが来ましたよ』

凜王は立ち上がり成都城の方角を見ていると、奥から兵士を連れた張任ちやうじんこと風音かかみねがやってきたのだった。

『凜王様！ やっと見つけました。お一人で歩かないでください！ 護衛をすることこちらの身にもなってください！』

凜王と合流して、すぐに詰め寄るのだった

『風音、そう、怒らないでください……今宵の散歩で得るものがありましたから』

『得るものですか？』

首を傾げ、凜王の後ろで座っている祥吾を見ると

『貴様！ 何者だ！？ 怪しげな仮面を付けて…まさか！？ 賊か！？』

風音は、祥吾に向かって行くが、凜王に後ろから抱きしめられる。

『待ちなさい。この青年は賊ではありませんよ…少し怪しいですが僕のお気に入りに入った人です』

凜王のお気に入りとは、凜王自身が気に入ると相手を真名で呼び、自身の真名を教えている存在なのだ。

お気に入りお気に入りにされている人物は妹の劉循りゅうじゅんこと夜空よんくうと張任ちやうにんこと風音と仙人、于吉うきちと左慈さじ、そして新たに孟達もうたつこと祥吾の5人のみである。

『そうなのですか！？ では、あそこで死んでいる賊は？』

納得してない顔で風音は凜王を見るが

『あの賊達あのかくに襲おそわれましてね。…その時、祥吾しょうごに助けてもらったんです……祥吾しょうご、名乗りなさい』

凜王は祥吾を見ると、祥吾は立ち上がり

『姓を孟 名を達 字を子敬 真名を祥吾だ……仮面は訳あって外せないが勘弁してくれ』

祥吾は先程、凜王に言われた通り言ったのだった。

『孟達殿か…私は姓を張 名任 字飛燕だ……孟達殿、会ったばかりだ真名は遠慮させてもらう』

『む？ …よくわからんが了解した』

真名のことを、何も教えてもらっていないので適当に了承するのだった。

それを見ていた凜王はなぜか不満な顔をしていた、なぜかというこ

『……僕の可愛い風音、抱きしめているのに動じなくなりましたね

……』

しょうもない事で少し、不機嫌になっていた。

その問いに風音は

『凜王様、もう慣れました』

頻繁にやられていては、誰でも慣れてしまうものだった。

『前は反応が可愛かったのに……そういえば湯の香りがしますね……
…ああ、そうでした』

何かを思い出したようで風音の耳元で

『…今夜は寝かせませんよ』

とつぶやくと

『り、凜王様……』

風音は思い出し、顔を見る見るうちに真っ赤にしていく、その反応に満足したのか

『冗談です。今夜はやめましょう……疲れましてね』

風音を抱きしめるのをやめる

『…あ』

少し、名残惜しそうにする風音だった。

そんな、二人を見ていた祥吾は

『イチヤイチャしてんじゃねえよ』

と言い放った。

『ふふふ…まあ、そんなイライラせずに……風音』

『はっ！ 何でございましょう凜王様』

『祥吾は、天の人間です…信頼している風音には教えておきます』

『天の人間ですか……わかりました』

『祥吾にこの世界の事を教えてあげてください。』

『御意！ よろしく頼むぞ、孟達殿！』

握手をするため手をさしだす風音。

『…ああ』

祥吾は一瞬戸惑ったがそっぽを向いて握手をするのだった。

『では…帰りますよ』

凜王の合図で凜王達は成都城に向かって歩きだしたのだった。

その道中

『……祥吾』

『…なんだ？』

『僕の可愛い妹と風音に手をだしたら殺しますからね』

と言い放ち、場を白けさせたのは余談である。

第十席〜巖顔、師匠と弟子のこと〜（前書き）

感想ありがとう

まだまだ、オリキャラ募集中

第十席く敵顔、師匠と弟子のこと

軍議が終わった後、敵顔げんがんこと桔梗ききょうは、自室に戻りお酒を飲んでい
た。

『…劉璋様の考えていることが僕にはもう理解できん！』

先程の軍議を思い出しながらお酒をどんどん飲んでいく。
周りには、お酒がなくなつた徳利が数十個転がっていた。

この桔梗の部屋に居るのは桔梗だけではなかった

『桔梗様！ 食料庫から酒を持ってきました！』

桔梗の部屋に徳利をいっぱい抱えた一人の美少女が入って来たの
だった。

『おお！ 焰耶！ ご苦労じゃったな』

桔梗に焰耶と呼ばれた美少女は、姓を魏き 名を延えん 字を文長ぶんちよう 真
名を焰耶えんやとって、桔梗の愛弟子である。

『桔梗様、あまり酒を飲みすぎると身体を壊しますよ？』

先程から大量に飲んでいるため控えた方がいいと提案をするが…

『焰耶よ、儂を甘く見るではない！ この程度、飲んだうちに入らん！』

焰耶から徳利を取り上げ、一気に飲んでいく。

その姿を見ていた焰耶はハッ！として

『桔梗様、今宵で約束の三月です！ 例の物をワタシにくださるのですよね？』

焰耶は無邪気な子供のように桔梗に聞く

『もう、三月も経ったか…うむ、約束は守ろう！ 儂の机にある小箱を持ってきてくれ』

『はい！』

焰耶は元気よく返事をして机に向かって行き、一つの小箱を持って桔梗の元へ戻ってきた

桔梗はそれを受け取ると、小箱を開ける、その中には色とりどりのリボンが入っていた。

『さて、焰耶よ。何色がよい？』

桔梗は、中に入っていたリボンを取り出し、焰耶に渡す。

焰耶は受け取って、嬉しそうにリボンをひとつづつ手にもって眺めている。

なぜ、このような状況になっているかというところ、実は焰耶は小さい頃に桔梗からもらったピンク色のリボンを持っていたが町のころつきと喧嘩したとき破れてしまったのだった。

破れてしまったため、恐る恐る桔梗に報告すると、お仕置きをされたのだった。その後、三月、喧嘩や騒ぎを起こさなければリボンを新しくあげると桔梗が言ったので、焰耶は毎日していた喧嘩を今日までまったくしなかったのだった。

『焰耶よ、三月経ったからと言って喧嘩はするなよ？』

桔梗が言うと、一旦眺めるのを止めて

『本当にすいませんでした、桔梗様。もう、喧嘩はしません……。ワタシは心配でした桔梗様との大事な絆が無くなってしまい……。ワタシはまたひとりぼっちになってしまっているのではないかと』

焰耶にとつて、桔梗からもらったリボンは大事な、人と人を繋げる大切な絆なのである。

『安心せい。　儂と焰耶の絆はちょっとやさそつとでは切れぬ。　わかったな？』

桔梗は、焰耶の頭を撫でるのだった。

『……はい。…ありがとうございます』

泣きそうな顔で桔梗に例を言うのだった。

『僕の弟子ならば、簡単に泣くな？ さあ、どれがいいか決めるが

よい』

『はい！』

焰耶は再び、色とりどりのリボンを眺めるのだった。

それから、少しして

『やっぱり、この桃色にします！』

焰耶は前と同じ桃色…ピンクにしたのだった。

『ん？ 前と同じ色だがよいのか？』

『はい！ いろいろと考えましたがやっぱりこの桃色が良いです！』

嬉しそうな表情でリボンを抱きしめるのだった。

『そうか、わかった。無くさぬように端っこに焰耶と書いてくのだぞ』

『桔梗様、ワタシはもう、子供ではありません』

『僕から見ればまだ、子供だ！ さあ、書いてこい』

桔梗は焰耶の頭をワシヤワシヤと撫でる。焰耶は気持ちよさそうに目を細める。

『うう…わかりましたー』

焰耶は、桔梗の部屋に置いてあった、墨が付いた筆で、リボンの端っこに焰耶と書いたのだった。

『桔梗様、書き終わりました』

焰耶が桔梗に報告すると

『うむ。焰耶よ、付けてやるから貸せ』

桔梗は焰耶からリボンを受け取ると焰耶の首に付けてやるのだった。

『ありがとうございます！ 桔梗様』

焰耶は桔梗に頭を下げるのだった。

『うむ。そうだ、焰耶よ。明日、お前を劉璋様に紹介する』

『ほ、本当ですか！？ ということは将として劉璋様に仕えられるのですね！』

やっと、役に立てると思った焰耶は大喜びで満面の笑みを浮かべていた。

『だから、明日の朝に儂の部屋に来ること！ よいな？』

『は、はい…』

『では、お主の部屋に戻るがよい……明日は早いからな、寝坊をするなよ？』

『安心してください！ 徹夜しますから！』

『馬鹿者！ 徹夜して、体調を壊したらどうする！？』

桔梗は、焰耶の頭に一発拳骨をするのだった。

『痛っ！！ ……ううー分かりました』

焰耶は涙目になりながら、殴られた頭をさする。

『では、部屋に戻れ、後片付けは儂がしておく』

『…はい』

焰耶はまだ痛いのか頭を抑えて桔梗の部屋を出て行ったのだった。

焰耶が出て行くと桔梗はリボンを小箱にしまっていく、その時だった手にとって水色のリボンが足下に落ちたのは

『お！？ 儂としたことが…』

落ちた水色のリボンを再び手に取った時だった、あることに気づいたのは

『…これは？』

桔梗が水色のリボンを見ると端っこの方に真名が書いてあったのだった。

『……………』

桔梗は、この水色のリボンを見ながらあることを思いだしていたのだった。

――十数年前

一人の少年と、若かった桔梗が一緒に居たのだった。

……少年は

『桔梗！ 俺にも桔梗と同じ奴くれよ！』

少年がせがんでいるのは、桔梗が首に巻いてあるリボンであった。

『くら！ 師匠である、わたしを呼び捨てにするのではない！』

『師匠って言っても、俺の世話係だろう！』

少年が言ったとおり、当時は桔梗は少年の世話係であったのだ。

『劉焉様から言われております。鍛えろと！ そのかわりに弟子にしている！』

桔梗が少年に言うと

『むう、母上が言うならしかたないか………なら、師匠！ 俺にもくれ！ それ巻いてるのなんかカッコいい！』

桔梗のリボンを指をさして言う少年。

『わかった。何色がいいのですかな？』

『俺は、水色が良い！』

『水色なら、ちょうど持っておるの』

桔梗は懐から水色のリボンを取り出した。

『やったあ！ 早く付けて！』

少年は、大喜びして桔梗に笑顔を見せるのだった。

『わかったから、ジツとしている！ って動くな！』

何とか首に巻くと

『やった！ これで、お揃いだね 桔梗 』

『無くしてもいいように名を書いておくのだぞ！ って、師匠と呼べ！』

少年に桔梗から拳骨が降り立ったのは言うまでもなかった。

『痛っ！！ ……うう、…でも、これで俺と桔梗の目に見える絆ができたね でも、目に見えない絆も俺と桔梗にはあるからね忘れないでね 』

少年は満面の笑みで桔梗に笑いかけるのだった。

そこで、桔梗はハッとするのだった。

『目に見える絆か……忘れておったわ。 目に見える絆が消えただけで、目に見えぬ本当の絆は消えていないのであろう？』

…儂はずっと信じておるぞ』

桔梗は、端っこに凧王と書かれた水色のリボンを小箱にしまうのだった。

第十一席〱劉循、相談すること〱(前書き)

今回は伏線がございます！

感想お待ちしております)

(

第十一席〱劉循、相談すること〱

【祥吾 side】

俺の名は岩見祥吾、27歳の男だ……って、今は、前の名前だ。

今は、姓を孟 名を達 字を子敬 真名を祥吾と名乗っている。

俺はどうやら、タイムスリップしてしまったようだ…しかも、昔に読んだ三國志の世界に……だが、ただの三國志の世界じゃない…有名な武将が女になっていた。

個人的に好きな諸葛亮も女になっているのだろうか？

話しはそれだが、なぜ俺がこの世界にタイムスリップしたのかは分かっていない。前の世界で野宿をしていたら、突然、神々しい光に包まれて、目覚めたら森に転がっていた…

で、なんやかんやで変な青年に拾われたということだ。

『今、失礼な事を考えませんでしたか？』

急に話しかけてきたのが、俺を拾った、劉璋改めて凜王だ。

『…人の心を勝手に読むな』

ちなみに今、俺と凜王は二人で凜王の部屋に居る。

決して勘違いはしないでほしい変な意味はない。ただ、新しい服を貰いに来ただけだ。

俺の服装はこの世界では、かなり目立つから、変えるということだ……このスーツ、結構高かったんだけどな…

『…ありました。これを着なさい』

クローゼットをぐそぐそと探していた凜王は、やっと見つけた服をポイツと俺に向かって投げた。

それを受け取って広げると

『…忍者服？』

受け取った服は、黒を基調とした時代劇でよく見る忍者が着ている服とまったく同じであった。

…なぜ、この時代に？と考えていると

『それは…母上が作った服なんです。僕には必要ないので差し上げます。』

と凜王は言ったのだった。

『いいのか？ …俺に？』

『ええ、構いません。それよりも用はないでしょう…部屋の外かまねに風音を待たしていますから、用意した部屋に案内してもらいなさい』

凜王は一方的に言ったと思ったたらそのまま、寝台に転がってしまった。

俺は、寝台に転がっている奴から、早く出ていけオーラがハンパないのですぐに部屋を出るのだった。

…というか、本当に凜王について行っていいのか？？

久しぶりに不安に思っただった。

【祥吾side end】

次の日、凜王が目覚めるとある人物が部屋に訪ねて来たのだった。

『あんちゃん！ 大変！ 来て！』

慌ただしく自室に入って来たのは凜王の妹、劉循リウジュンこと夜空ヨソだった。

妹の声に反応しガバツと寝台から上半身を起きあがらせて、声が出た方を見ると、寝衣着姿の夜空が若干涙目で見ていたのだった。

『…どうしました？ また、怖い夢でも見ましたか？』

夜空は、怖い夢などを見ると部屋にやってくるので、またかと思っていたが

『違うの！ いいから、あんちゃん、夜空の部屋に来て』

夜空は寝台に近づき、兄の腕を掴み、無理やり寝台から引きづりだす。

太陽が顔を出したばかりで昨日は、寝たのが深夜だったので、まだ寝ていたかったが、可愛い妹のためと、仕方なく起きて引っ張られながら、夜空の部屋の前に向かったのだった。

夜空の部屋の前に着くと

『あんちゃん、心の準備はいい?』

何を備えて心の準備をしなければならぬのかと不思議に思いながら、頷く。

そして…

『せえーの!』

夜空が部屋の扉を開く、そして凜王が部屋の中を見ると

『……………蝶?』

部屋の中には、蝶と進化前のさなぎや幼虫がたくさん居たのだ。た。

『不思議ですね。 ……目を覚ましたら部屋中、蝶だらけですか…』

『最悪なのは、幼虫だよ! 目を覚ましたら身体を這いずり回って!』

一旦、凜王の部屋に戻って、何があったのかと話していた。

凜王は不思議がり、夜空は這いずり回られた感触を思いだしたのか顔を青くしていた。

そして、若干震えながら、夜空は言う。

『ここ、最近変なことばかり起るの』

『変なこと？ どうしました？』

凜王は眉を潜めて夜空に尋ねる。

『実はね…母上が亡くなった頃からなんだけど』

夜空は語り出すのだった。

『最初は、母上が亡くなって、すぐだったの…夜空の部屋に山盛りの果物が置いてあったの。その時は、精神的にやられちゃって、何も食べれなかったから、心配した侍女か紫苑様達が置いてくれたのかな？ と思ってたんだけど』

真剣な表情で話す夜空、そして、凜王は何かを考えるように目をつぶり、夜空の話を聞く。

『…それが、三日間続いたの。さすがに不思議に思ってた侍女と紫苑様達に聞いたんだけど、誰も知らないって……もしかしたらあんちやんかな？』

とって風音ちゃんにも聞いたら、あんちゃんにずっと付いてたけど夜空の部屋には来てないって……』

『確かに……僕は、母上が亡くなられた日から三日間は、夜空の部屋には行ってません。ですが、そのような行動を僕ぐらいしかなさうなんですけど……不思議ですね』

少し、含みがある言い方をしているが凜王はしていない。

『…それだけじゃないの』

『ん？ まだ？』

凜王は、目を開け夜空を見ながら、事前に用意していたお茶を口に運ぶ。

『うん。三日経った後、いつまでも落ち込んでじゃダメだ！と
思って身体を動かすため一人で鍛錬してたんだけど、ちよつと失敗して、足擦りむいちやつたんだ。そしたら、次の日、部屋に擦り傷に良く効く、薬草がたくさん置いてあったの……』

『…なんとも奇怪な』

『一人で鍛錬してたから夜空しか知らないし……でも、たまにあんちゃん、どっかから見てるときがあるから、もしかして……と思ったけど風音ちゃんに聞いたら違ってた』

『…む？ 意外とやりますね。僕に気づいていたとは』

少し、驚いた表情をして飲んでいたお茶を机に置く。

『でも、それを最後に何も起こらなくなっただけど…今度は誰かに見られてるような視線を感じて。』

今日、起きたら…ああ、なつてたの。それで、怖くなって、あんちゃんに相談に来たの！ お願いあんちゃん！ 助けて！』

夜空は、凜王の手を握り、頭を下げて懇願する。

その時だった、凜王の部屋の扉から声がした。

『それは、ストーカーだな！』

声の主は、昨夜に凜王が拾った祥吾であった。

凜王は、最初から気づいていたのか、まったく驚かずに

『主君の部屋に勝手に入ってくるとはいい度胸ですね？ もう、あなたは僕の臣下なのですから礼儀を正しくしないと………斬首にしますよ？』

凜王は、寝起きだからか、妹との会話に入ってきたからなのか理由は不明だが、眉を潜めながら言った。

言われた祥吾は

『これは…失礼した。今度から気をつけます、主殿……これで、よろしいか？』

般若の面をしていて、表情は読み取れない。

『まあ、いいでしょう…で、先程の…』

凜王は、先程の単語の意味を聞こうとするが

『へえ、変な面を着けてる人…鬼…かな？　　というか誰？』

先程まで座って、話していたはずの夜空が、珍しい物を見るようにジロジロと見る。

『お、おい…あまり見るな……主殿！』

間近でジロジロと見られるので困って凜王を呼ぶ。

『夜空、やめなさい。　　彼は昨晚、僕の臣下になった』

『姓を孟　名を達　字を子敬だ』

昨夜に張任こと風音に真名について聞いたらしく、今回は容易く真名は名乗っていなかった

『ふうくん、あんちゃんの部下になったっていうわけね。　　夜空は、姓を劉　名を循　字を幼玉、よろしくね』

夜空は手を差し出して握手しようとするが

『よろしく頼む。しかし、握手は遠慮する』

握手を断った理由は、夜空の後ろから見える凜王が、まばたきもせずに、ジッと祥吾を見ていたからだだった。

『握手嫌い？　　ならいいや。　　で、さっきのすとかーって、なに？　　聞いたことないけど』

不思議そうに頭を傾げて聞くと

『ストーカーとは、特定の他者に対して執拗につきまとう行為を行う人間のことをいう。』

もっと、詳しく言えばつきまとい・待ち伏せ、監視していると告げる行為、乱暴な言動、面会・交際の要求、性的羞恥心を害する行為などのことを言う』

祥吾は分かりやすく教えるのだった。

『つきまとい・待ち伏せ……じゃあ、あんちゃんはすーかーさん？ たまに、夜空が出かけるとき後ろから付いて来たりしてたから？』

夜空はズバツと言ってしまった……決して悪意があるわけではない。そして、言われた凜王は、固まっていた。

『孟達さんって、物知り〜！ 物知りの人と結婚すれば、お勉強しなくてすむのになあ〜』

ニヤニヤと笑いながら、祥吾のことを肘で突つつく

『……………』

こんなことを言われたのは初めてなので、どう返事したらいいかわからない祥吾であった。

『結婚すればなあ〜』

困った様子の祥吾を見て、ニヤニヤする、夜空。
さすがは凜王の妹、人をおちよくるのは大好きなようだった。

そんな、二人を見ていた凜王は

『…認めませんよ。 あんちゃんは結婚など認めません!!』

立ち上がり珍しく声を荒げたのだった。

それを見た、夜空は

『あんちゃん、冗談だよ』

『……冗談ならいいでしょう』

凜王は椅子に座った。若干冷や汗を流して

そして、それを見ていた祥吾は

『主殿は…どつちかというストーリーカーではなく、シスコンだな』

『孟達さん、しすこんってなに?』

新しい単語を聞いた夜空が目を輝かせて聞くと

『シスコンとは…特に、姉妹に対する恋愛的感情や自分のものにし
たい独占欲がある人の事を言う………っ!!』

——その瞬間だった

——部屋に風が舞ったのは

『…主殿、急に斬りかかってくるなんて危ないぞ?』

『……表に出なさい。……ちょうどいい機会ですから、あなたの力を試してあげましょう』

お互い、己の武器を抜いて、つばぜり合いをしていたのだった。

第十二席 劉璋、興が冷めるのこと (前書き)

久しぶりの更新

第十二席く劉璋、興が冷めるのこと

――成都城・庭

成都城にある、大きめの庭に凜王こと劉璋と祥吾こと孟達がお互いの得物を構えて対峙していた。

『主殿！ 寝間着のままだと怪我をしますぞ？』

祥吾は、まだ慣れない敬語を使って凜王に言うが

『心配ありません。それよりその服、良く似合っていますよ。不審者に間違わなければいいですが』

凜王は、本当に祥吾に忍者服が似合っているため、誉めながら含みのある言い方で不敵に笑う。

『それでは、孟達さん、あんちゃん、準備はいい？』

と二人の試合の審判をするのは、凜王の可愛い妹、夜空こと劉循。こちらもあるまま部屋を出て来たので寝間着である。

ちなみにこの庭に居るのは三人だけではない、騒ぎを聞いた、桔梗紫苑焰耶左慈于吉といった面々である。

『ふむ。アレが風音が言っていた男か、劉璋様、相手にどこまでできるか楽しみだの』

桔梗は、風音に新しい男が仲間になったと聞いていたため力量を測るために祥吾を見る

『そうね。…それと、仇の力量を測るにはちょうど良い機会だわ』

紫苑は、最後の方を小さくつぶやき、桔梗とは対照的に凜王を見る

『あ、あの人が劉璋様！ まさか実力を見れるなんて感激だ！』

焰耶は、自分が仕える、主の実力を間近で見れることに目を輝かせて感激していた。

『まったく、朝っぱらから騒ぎやがって！ しかも寝間着かよ』

左慈は、眠たそうな顔をして二人を見ていた。

『左慈、あなたも寝間着ですよ！ そして私もね！』

于吉は、左慈にツッコミをいれた後、自分にもツッコミをいれたいた。

『それじゃ！ 模擬試合！ 始め！』

夜空の合図で試合が始まったのだった。

両者同時に動いたその時だった。

『我が君！ 大変です！』

風音が慌てた様子で皆が集まっている庭に走って来たのだった。

それに、気づいた凜王は

『…祥吾。 …一旦中止です』

構えを解いて、自分のもとに駆け寄って来た風音を見る。

『そんなに慌ててどうしました？』

息を切らしている風音に聞くと一呼吸して息を戻して

『袁紹からの密書でございます！』

風音は、手に持っていた密書を凜王に渡す

『本初ですか……ふざけた文じゃなければいいのですが……』

凜王は、袁紹を知っているらしく、苦笑いをしながら受け取って密書を読む。

『……………』

凜王は読み終わると黙って密書をくるくると巻いていく。

『劉璋様、内容は？』

やはり気になるらしく桔梗は凜王に尋ねると

『午後から軍議を開きます。その時、お話ししましょう』

と言うと、凜王は祥吾の方を見て

『興が冷めた。試合はやめにしましょう……次、あの言葉を言ったら……殺しますからね？』

『ああ、気をつけるよ』

祥吾も構えを解いて返事をする。凜王に睨まれる

『主殿、今後気をつけます』

タメ口だったことに気づき敬語で訂正をすると、凜王はつつすと笑みを浮かべる。

そして、今度は夜空の方を見て

『夜空、今日は僕の部屋で寝なさい……あと、あの件は少し、思いあたることがあるので僕に任してください？』

言われた、夜空は笑みを浮かべて

『やったあー 今日、あんちゃんのお泊まりだ！ あんちゃんを信じてるから全部任せるね』

久しぶりに兄の部屋に泊まるのが嬉しいらしく、飛び跳ねて嬉しがっていた。

それを見ていた左慈は

『けっ！ なんで、そんなに嬉しいんだか！ 俺なら凜王と長時間一緒に居るの無理だな！』

『左慈、夜空の護衛なのでから夜空の部屋の掃除頼みましたよ』

『は？ 俺は召し使いじゃねえぞ！？』

左慈は、反論をするが

『契約をお忘れですか？』

『っ！ わかったよ、掃除すればいいんだろ、掃除すれば！』
契約という言葉聞いて左慈は、了承して庭から出て行った。

『左慈！ 私も手伝いますよ！ 二人で協同作業ですよ！』

于吉は、左慈の後を追いかけて行った。

そんな光景を見ていた、ほとんどの将は大笑いをしていた。

『さて…では、午後に軍議室にて軍議をしますから、遅れないように…』

凜王は言つと、寝間着のままなので、着替えるため部屋に歩いていく。

そんな凜王を引き止めたのは

『劉璋様！ お待ちください！ 紹介したい者が居るのですが…』

桔梗が紹介したいと言う人物は弟子の焰耶のことだった。

『…：ちょうどいい。用があり成都城の牢に行くので敵顔殿には、護衛をお願いします。用が終わりしだい話しを聞きましょう』

『心得ました。焰耶もよいな？』

『はい！ 桔梗様！』

凜王は、二人を引き連れて自分の部屋に戻ろうと歩みを再び始めるのだった。

凜王達を見送った将達は

『紫苑様、一緒に朝食、食べに行こう』

『そうね、璃々も待ってるから行きましょうか。でも、その前に夜空ちゃんはお着替えね』

二人は楽しそうに話しながら歩いていく

『それでは私達は、警邏に行くぞ。 孟達殿！』

『ああ、わかった』

風音と祥吾は、町の警邏に向かったのだった。

曹操外伝1〜劉璋、霸王に出会うのこと〜（前書き）

この曹操外伝は、凜王が洛陽にある私塾に通っていた時のお話です！

凜王は、性格、口調、一人称と本編と違いますが、この外伝は変わる前の以前の凜王となりますのでm（＿）（＿）m

外伝はちよくちよく入れていきたいと思えます（*^o^*）

曹操外伝1〜劉璋、霸王に出会うのこと〜

【外伝・霸王との出会い】

この後漢における洛陽の私塾は万人に門戸が開かれているとはいえず、洛陽の私塾は物価の面から言っても他の私塾に比べ金額がかさむと言わざるを得ない。

また、それすらも気にしないような裕福な者たちが通う場所でもある。

選ばされた組は成績の良い者が各地から集められるため、洛陽の秀囲気とは別物だと思っていたが、成績の良い者は良い教育を受けた者で、結局のところ一見して富裕層だとわかる者たちばかりであった。

そんな私塾に凜王は通っていた。

私塾は、名門出身の人物が多く、それゆえに、益州の小さな村出身で成り立ての益州太守の息子。

凜王こと劉璋の母、劉焉は農民から太守に成ったばかりなので同期の間でもかなり異色なものだった。

運良く太守になれた農民の息子と思われ入学早々、貧乏人と嘲る者もいれば、哀れがる者も多かった。

そういった人たちと親しくすることなど出来るはずもなく、下手を打たなくても孤立するということはすぐに理解できてしまった。

だからと言って、こちらを曲げてでもその輪に加わりたいとも思えず、同期の者たちとは微妙な距離が空くのだろうと感じていた。

そうして独り教室の机についていた自分の元に現れたのは、毅然とした態度ながら憤懣やる方ないといった様子の少女だった。

自分よりも年下で初対面にも関わらず睨み据えられたのだ。

『貴方ね、総代を務めたのは？』

総代とは、私塾に入学してきた新入生の代表である。そして、総代になるには入学試験で一番の成績になることが条件である。

『あ……ああ、一応、そうだけど』

目を瞬かさせたそう答えたならば、少女はさらに表情を険しくさせ小さく呻いたようだった。

『このような』

『えっ。』

少女が何を言いたいか想像すらつかず軽く首を傾げてしまったのが、さらに怒りを誘ってしまったようである。

少女は勢いよく机を叩きつけ、教室中に響くほどに声を荒げた。

『こんな脳天気な奴に私は負けたというのか！ ふざけるな！』

『のう、てんき……』

凜王は、確かに、母や妹達家族に、どこかのんびりしているとよく言われたものだが、他人から怒りをぶつけられながら脳天気と言われたのは初めての経験である。

呆然としていると、彼女はもう一度強く机を叩いてから踵を返して駆け出してしまった。

『ちよつと……！』

留めようと発した声も最早届かない。椅子を蹴るようにして廊下に出ると、姿こそ見えなかったが、走り去る足音が階下へと消え行くのが分かる。

皆の驚く視線を気にする余裕もなく、その足音を失わないように全速力で追いはじめた。

しかし、いくら本気で走ろうが一向に追い付く気配がしない。それどころか、息が上がる頃には既に足音は聞こえなくなってしまうていた。

『じじ、は……？』

廊下の窓から外を見れば、中庭らしき緑溢れる風景が広がっていた。

木がのびのびと繁り、想像していたより素朴な中庭に故郷を思い出し、思わず目を細めて眺め入る。いつ見ても緑というものは心に優しい。

ふと動くものを感じて目を凝らしてみたら、木陰に人影が見えた。

あちこちの枝葉がその背を見えにくくしていたが、あの金髪は先程の少女のものではないだろうか。

時折、太い木の幹に拳を打ち付けているのもそれらしい。

『手、痛いだろうに』

ここから声をかければ逃げられるような気がして、そっと出入口を探して中庭に降り立つ。半ばまで近付いたところで、こちらから声をかけてみることにした。あまり近付きすぎても失礼な気がしたのだ。

『あの、君さ』

ハツとしたように振り返った彼女は、こちらを認識するなり再び険しい顔になる。

『貴方……！ 何のつもりよ！』

『何って……えっと……』

思えば何を思って少女を追ってきたのだったのだろうか。

とにかく自分に怒りを覚えてる人を放って置くわけにはいかない気がして、追って来たような気がしなくもない。

『俺は何か君の気に障ることをした？』

すると少女の柳眉がさらに逆立ってしまった。

『 貴方のような腑抜けた奴が何故選ばれたのよ！』

教室での発言も鑑みると、どうやら、自分が総代に選ばれたのがよほど気に入らないらしい。

しかし、総代は単純に受験時の成績優秀者が選ばれるだけで、それ以上の深い意味はないはずである。

だから彼女が自分より良い成績を修めていれば間違いなく少女が選ばれただろう。

そこまで考えて、とある噂を思い出した。

今年は首席が二人いたらしい、と。

主席とは一番良く成績が良かった人物のことである。

『もしかして君が、もう一人の首席？』

『……そうよっ！』

小さい娘が私塾に入ること自体はそう珍しいことではない。小さい頃から質の高い教育を学べるということで、時折入学するものがある。

現在凜王は、歳は15歳で少女は、5つ6つか年下である。小さいながらも首席だということだから、本気で後漢の政を行う幹部を狙っているのかもしれない。

『すごいね』

素直に褒めたつもりだったが、相手はそうとってくれなかったようだ。

『総代に選ばれたのは貴方でしょ！』

『でもさ、君は……』

きちんと説明しようとした自分を少女は遮り、いきなりこんな言葉
を低い声で呟いた。

『癪かんに障る』

『え？』

『さっきから、人のことを君だとか呼ばないで！ 癪に障る！』

二人称にダメ出しされたのも初めてである。

『でも、俺は君の名前を知らないから』

『お前とか貴様とか他にもあるでしょ！？』

『え、えっと……』

女性に対して普段使い慣れない単語で口をばくばくさせていると、
長い沈黙の後、少女は深くて長い溜息をついた。

『……曹孟徳よ』

助け舟というよりは何かを諦められた雰囲気ではあったが、名前
を覚えてもらえたのはやはり嬉しい。

『ありがとう、孟徳。俺は……』

『知っているわ、劉季玉でしょ？』

『どうしてそれを？』

『皆の前で名を読み上げたでしょ、知らぬ者はいないわ』

『あ……そうか』

単純なからくりで頭をかいていると、孟徳は不意に真剣な表情になる。

敵愾心てきがいしんは多少薄れているが、それでも挑むような鋭い視線である。

『貴方には負けないわ。必ず勝ってみせる』

『……勝ち負けとか、そういうのじゃないと思っただけど』

『他人からの評価は得てしてそういうものよ。わたしは負けてない』
『どいられないの』

真剣な瞳にそれ以上反論することもできず、横を通り過ぎて行く孟徳をただ見送ることしか出来なかった。

少女の姿が見えなくなつてから木々から零れる空を見上げると、何故か不意に笑みが浮かんでくる。

あれほど真っ直ぐな信念を持ってぶつかられたことなど、未だかつてなかったのだ。

そして、身分や地位を重んじる私塾でそう接してくれる人は非常に貴重な存在になるだろう。

また、会うことがあればきつとどやされるに違いないが、これはこれで妙な縁ができたのは確かである。

『……………穩便にこしたことはないんだけど』

苦笑をもらしながら、凜王もまた中庭を後にしたのであった。

これが暴君、劉季玉と霸王、曹孟徳の出会いだった。

曹操外伝2(劉璋、霸王との奇妙な関係ができるのこと) (前書き)

この外伝は、昔の話しで華琳様は、大人びた子供です(*^o^*)

曹操外伝2 劉璋、霸王との奇妙な関係ができるのこと

【外伝・霸王と鍛錬】

今日の剣術指南の授業で、放課後は自由に修練場を使えると聞いた凜王は、先生に頼まれた仕事を片付けたその足で修練場に寄った。

修練場の着く前から、剣がぶつかる音や威勢のよい掛け声が凜王の耳に届き、身震いが走る。

ためらいつつも静かに扉を開け中の様子を見たならば、同期や上級生の生徒たちが模擬剣を使って鍛錬に励んでいた。

思ったよりも混んでおらず、剣を倉庫から取り出した凜王は空いてる場所を求めて視線をさ迷わせる。

途中、美しいまでの形を行う背中に目を取られ、息を止めて見入ってしまった。

一挙一動に無駄がなく、流れるべきところは流れ、止まるところは止まる……。姿勢にも乱れがなく、形を見るだけで、かなりの使い手だということが伺える。その者が一連の動作を終えるまで、彼は瞬きすら忘れていた。

形が終わり、その横顔が見えた瞬間、凜王は思わず声を上げそうになった。

この間、入学早々彼に怒声を浴びせた曹孟徳という少女だったのだ。

彼女も視線を感じたのか、ふと彼の方を振り返り……当然ながら表情を固くしたのであった。

しかし、初日は、それだけで終わった。彼女が無視を決め込んだのか、特に喧嘩を売られることもなく、会話すら交わさず、離れた場所ですら鍛練を行っていた。

しばらくはそうして接触を取らずに過ごしていたのだが、二週間も経った頃、急に彼女から声をかけられたのである。

その第一声がなんとこれだった。

『見てもらえないわ!』

突然のことに床に座ったままの凜王が目丸くしていると、少女の剣が寸分の狂いなく凜王の喉元ギリギリに当てられる。

『貴方、よくそんな腕前で首席を取れたものね!』

確かに、少女の腕前を見ていると凜王とは歴然の差がある。

他人を傷つけるのが嫌だとは思えど多少は剣を扱えるつもりだったし、同期の者たちには引けをとらないはずだったのだが、少女の技術はそういった次元をはるかに超えている。

『俺も、そう思う』

素直に答えたなら、彼女はさらに柳眉を逆立てて凜王を睨みつけた。

『立ちなさい!』

『え?』

『剣を取りなさい!』

『……ええっ!?!』

しかしその有無を言わさぬ気迫に凜王は剣を持って立ち上がる。

『……構えなさい』

腹を括るしかないようだ。凜王は固唾を飲み込んでから剣を握った腕を持ち上げた。

『行くわよ!』

掛け声と共に少女が電光の如く突きを繰り出してくる。

辛うじて剣を当てることができたが突きの勢いを削ぐことができず、身体を開いて避けざるをえなかった。

少女が横を抜けたその背を狙おうとしたが、その前に払いが飛んできたため、剣を噛み合わせて何とかその攻撃をしのぐ。

あつという間に体勢を整えた少女は、彼と刃を合わせたままにじり寄る。

凜王も本気で押し返しているはずであるのに、じりじりと押されてしまう。

『このままではマズイ!…っっていうか本当に子供かよ!?!』

一度、剣を大きく弾き返そうとした刹那、彼女の剣がするりと回転すると同時に、彼の剣が宙に舞った。

『え……?』

何が起きたか理解しきれず、手元に視線をやった凜王の目前に剣

先が突き付けられる。

『貴方は根本的に剣を理解していない。剣を恐れている』

『……っ』

いきなり核心に近いところを突かれ、凜王は鼻白む。剣の達人は剣を合わせただけで全てを見抜くというのが、少女もそれに近いものがあるのかもしれない。

『剣を拾いなさい。もう一度よ』

今度は凜王もためらわずに剣を拾い上げ、前に構える。

『……行くぞ』

何度も剣をぶつけ合い、剣を飛ばされ、時には^{ねじ}挨拶せられながらも、そのスパarringは凜王がへばるまで続いたのであった。

『ふん。……ところで貴方、何処までついて来る気なの？』

一方的にシバかれた後、私塾の屋敷に戻るために歩いていた。そして、見れば屋敷の入口に着いていた。

『え、俺もこの屋敷だけど』

そもそも新入生はほとんどがこの屋敷に入っている。とは言え、少女の鋭い視線に刺されれば、少女が部屋的位置を知られたくないというのは凜王でも容易に想像できた。

『えっと、それじゃあ、俺は先に戻るから。……また、頑張ろうな』

軽く手を振って彼女に別れを告げ、歩み始める、凜王の背に微かな眩きが届いた。

『……貴方には絶対に負けないわ』

凜王は苦笑を滲ませながら、しかし後ろの少女に悟られないよう平静を装って歩み続けたのであった。

こうして、劉季玉と曹孟徳には何とも不思議な関係が築かれたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4732w/>

真・恋姫†無双～暴君と呼ばれし者～

2011年10月13日12時50分発行